

『虞美人草』 藤尾に関わる色

Junko Higasa 2013.10.6

気になるのは、藤尾の永眠の場面の色である。藤尾の亡骸の傍には銀屏風が逆さに立てられている。

銀色はもとより小野さんの銀時計の色である。藤尾という虞美人草の愛がその色の中から生まれ、そこで乱れ咲いて、愛の逆転に没したと受け取れる。

次は虞美人草の花の色である。そこに描かれた赤と紫。それはもともとの虞美人草の花の色である。しかしその色合いには3つの意味が見て取れる。

まず紫は、愛の女王：藤尾が例えられたクレオパトラを意味し、藤尾がつける香水の原料であるヘリオトロープという「恋」を意味する花の色である。

そして赤は、項羽の傍に生きた虞という女性が、項羽が漢軍に敗れた時、足手まといにならないように自殺した地に赤い花が咲いて、それが「虞美人草」と呼ばれたという話に基づく色である。

更に赤は、桓武天皇から始まり北条氏に至る「桓武平氏」の流れでをくむ、驕れる藤尾の死で終わった「平家」の旗の色である。

そして藤尾にあげられた線香の描写に藍が登場する。線香はもともと燃えつきても棒のまま倒れるが、漱石は繰り返しそれを描写する。それはまるで戦いに敗れた兵士たちが倒れる様である。そしてその線香の煙の「藍」は源氏の旗印である。

漱石は日本、中国、ヨーロッパの戦争の悲劇を、これらの色に象徴させているように思える。